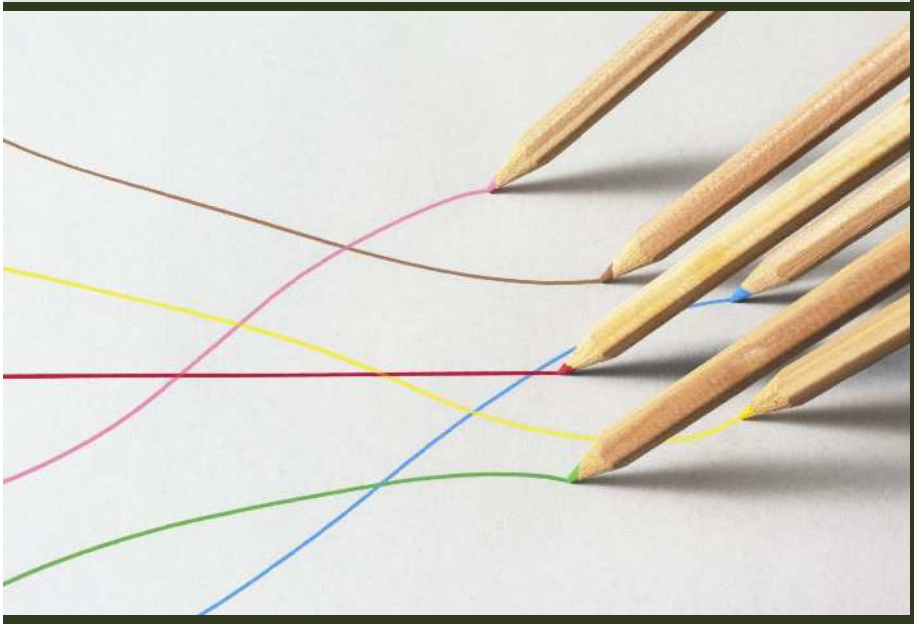

北九州市
発達障害者支援地域協議会・専門部会

第一部会・支援システム

検討部会（第六回）

2022.2.22 19:00～

本日の予定

※ 20時30分
終了

〔議題　１〕
・事例検討（その４　基幹相談支援センター）
　基幹相談支援センター　センター長　横田　信也　氏
（進め方）
・事例発表の後、部会長が論点に沿って質問、発表者と
　質問者が対談。その後、部会構成員との意見交換。
〔３０分程度〕

〔議題　２〕
・専門部会議論のまとめに向けて
（進め方）
・事務局より、これまでの事例検討における主な意見を
　資料に沿って説明。その後、部会構成員による意見交換。
〔４０分程度〕

〔振り返り〕

第一部会
事例検討
について

【第一回】
・　地域医療連携　　（山口構成員）
・　学校等での支援　　（角田構成員）

【第二回】
・　大学での支援　　（米光構成員）
・　就労支援　　（大坪構成員）

【第三回】
・　保護者支援（つばさ　金光センター長）
・　地域相談支援　　（安武構成員）

【第四回】
・　成人期の支援
　（基幹相談支援センター　横田センター長）

〔振り返り〕

①地域医療
連携
【その1】

【療育センターの視点から】

・　療育センターでは初診の待機児童が増え、待機期間が長くなっている。待機の間は地域の学校、相談支援機関、近隣の小児科が対応している。

・　中、高校生については地域の精神科で対応いただけるケースも増えているが、小学生は難しく、小児科を頼る保護者が多い。

・　重症ケースはなるべく早く療育センターで対応したい。初診待機中も療育センターで相談を受ける。

・　逆に、療育センターで安定しているケースを地域の小児科、精神科へ引き継ぎたい。

・その場合に必要なこととして、互いの役割分担を明確にする必要がある。

・　単に「様子を見てほしい」と頼むのではなく、こういう時はすぐに連絡、相談してほしい、など、役割分担を具体的かつ明確にして連携することが大切。

〔振り返り〕

①地域医療連携【その２】

【小児科医の視点から】

・　小児科医が療育センターと連携して発達障害児をフォローする際に一番困るのは、小児科医に何ができるのか、何をしたら良いかがわからないということ。

・　子どもの様子を見るにしても、何をどう見たらよいか分からない。保護者からアドバイスを求められても、どうアドバイスしたらよいのか、具体的なところが実は全然わからない。

・　一般小児科が、いろいろな専門機関の支援システムに連携を取る中で、日ごろどのように関わったらよいか、どこに注意すべきか、いつ専門機関に繋ぐべきかなどが学べるとよい。

・　一般の小児科は、発達障害児者の支援に係る地域の社会資源に関する情報を、殆ど持ち合わせていない。

・　高齢者介護の地域包括支援センターやケアマネジャーのように、社会的なサポートや医療機関などの情報を常に持ち、相談や手続きのアドバイスができる専門家がほしい。

〔振り返り〕

②学校等での支援【その1】

【教員の視点から】

・　学校の教員は、子どもの状態がどの程度であり、どの医療機関に繋ぐべきかなどについて、自ら判断することは難しい。

・　学校は教育を学校現場で保障したいと考えがち。何とか自ら本人や保護者に働きかけようとするが、問題の受け止め方のずれや、学校からは見えにくい家庭の事情などが背景にあり、思いもよらず関係が悪化してしまうことがある。

・　教員は療育センターや子ども総合センターに一方的に頼りがちで、ケースの内容を精査し、連携先でできることの限界を判断することがまだできていない。

・　スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーに関わる中で、専門機関の機能や役割について判断できる教員も増えつつある。

〔振り返り〕

②学校等での支援【その２】

【スクールソーシャルワーカーの視点から】

・　紹介事例では、担任が校内の調整役を担い、コアメンバーで話した内容を都度管理職に報告して了解を得てくれた。校内の共通理解を図るような働きかけがあった。

・　連携のポイントはケース会議。ＳＳＷが調整役となることが多く、協議したい内容や目的にあわせて都度開催した。

・　特に全体で共有できるツールはなかった。だからこそ、こまめに関係機関で連絡を取り合った。主体となっているところに必ず連絡を入れ合い、情報に漏れがないよう努めた。

・　連携を図るうえでは、連絡が被っても良いので、何度でも連絡を入れる。その積み重ねが大切と思う。

【全体の視点から】

・　発達障害の分野はとても幅が広い。一人のコーディネーターがすべての調整を担うのではなく、分野別、世代別のコーディネーターがいて、内容に応じて適切な人材に繋がることが出来るとよい。

〔振り返り〕

③大学での支援

【大学生の視点から】

・　大学生ぐらいになると、自分のアイデンティティもしっかりしてきて、自分の思いやプライドを大切にしながら、生き方に悩みつつ前に進もうとする学生がたくさんいる。

・　一方で、初めての一人暮らしでご飯をつくる、掃除をする、そういう日常生活の段取りから支援をしないと、そもそも生活が成り立たないことがある。

・　幼少期から子どものことを理解して支えてきた保護者の中には、入学直後に学生支援室に足を運んでくれる方がいる。本人、保護者、時には高校の先生にも声をかけて皆で支援の依頼をされることがあり、そういうケースは問題なく大学生活を送っている。

・在学中の早い段階から、将来の進路についていろいろな方向性や支援があることを、就労支援の側から発信いただけると、大学側としても非常に助かる。

・　市内の大学相互で意見交換を行うなど、大学間の連携をつくっていこうという動きもある。

〔振り返り〕

④就労支援
【その1】

【本人の視点から】

・　成人期に入ると、本人主体ということが前面に出てくる。それまでは様々な形で支援を受けていたが、成人後は自ら決めないといけない状況がでてくる。

・　自分に合う仕事が見つからず、周りの意見に流されてしまうと働き出してもうまくいかない。

・　発達障害のある人は真面目な方が多く、一生懸命ギリギリまで働いて無理をすると、二次障害に繋がってしまう。

・　やはり己を知らないことには前に進めない。自己理解があって、はじめて相手にも理解してもらえる。

・　自己理解のポイントは、自分の苦手なことを知っていること。そうすると周りのアドバイスが入りやすい。自分の苦手さを理解していることは必要と思う。

・　自己理解、自らスキルを身に着けることは重度の人の場合は難しいと思う。その場合、周囲が本人に会った環境を整えるなどの支援が必要。

〔振り返り〕

④就労支援
【その２】

【企業の視点から】

・　発達障害の人をどう受け入れて支えていくかということが、企業にとっても非常に大きなテーマとなっている。

・　企業は発達障害の知識は持っていても、一人ひとり行動が全く違っていたりして、実際には戸惑うことが多い。ある程度継続して企業を支える仕組みが必要。

・　障害者雇用アドバイザー事業の中で、経験豊かな企業が経験の浅い企業を直接アドバイスする取り組みを行っている。こうした工夫が重要。

・　できれば学生時代に本人と共にどのような取組を行い、どういう成長が見られたのか、などのこれまでのプロセスがわかると、次の支援につながりやすいと思う。

〔振り返り〕

⑤保護者支援

⑥地域相談支援

【その1】

【保護者支援について】

・　困っている中で最初に助けてもらったのは親の会だった。切羽詰まった親にとっては、専門家の意見よりも経験した親の言葉が一番支えになり解決に繋がる。

・　支援機関による相談支援の中で、相談者を親の会などの地域活動につなぐことができれば支えになると思う。

・　受診待機している人などを医療機関が抱えなくても、親の会など地域で活動しているところと連携出来たら良いのではないか。

・　支援者はどうしても専門職としての物差しで見てしまう。そこで先輩保護者と支援の必要な保護者を招いた「お話し会」を開催し、先輩保護者から（支援者も一緒に）保護者の気持ちや支援のタイミングについて、話を伺っている。

・　支援のタイミングを計ることは難しいが、まずはこうした語り合いの場に来てくれたことが一つのタイミングではないか、と思う。

〔振り返り〕

⑤保護者支援

⑥地域相談支援

【その２】

【連携、支援のツールなど】

・　ＳＮＳの活用を含めて、いろいろな媒体を通して繋がり方を多様に考えることも必要ではないか。

・　迅速かつ効率的に、と考えたときにデジタル化は避けられないが、一方で個人情報の壁や情報流出の問題が出てくる。こうした問題をどうクリアするか、まだ答えは出ない。

・　つばさのサポートファイル「りあん」はページ数がとても多く、保護者が一人で書くのは難しい。デジタルに慣れている保護者にとって、紙に書く作業は戸惑うだろう。

・　「トリセツ」というツールを作ったとき大切にしたことは、教員と子どもの信頼関係をより強くしたい、という思いを伝えること。

・　保護者から教員に支援を求める際には、まず日々の支援への感謝を伝え、そのうえでお願いしたいことを一つか二つに絞って伝えるとよい。

議論のまとめに向けて

これからの支援システムに必要な機能（その①）

【これまでの事例検討、意見交換より】

・　発達障害の分野はとても幅が広い。一人のコーディネーターがすべての調整を担うのではなく、分野別、世代別のコーディネーターがいて、内容に応じて適切な人材に繋がることが出来るとよい。（再掲）

・　地域にはいろいろなコーディネーターがいる。それぞれに専門や得意分野がある。そのコーディネーター間のネットワークをどうコーディネートするのかも重要。

・　支援ニーズに合った、それぞれの専門分野のコーディネーターが配置されたような組織ができるとよい。

・　コーディネーターを集約化する必要があるのではないか。情報の集約、相互開示、発信など、各機関のケース情報をどこかで集約、発信し、フォローアップの状態も確認できるような仕組みが必要ではないか。

議論のまとめに向けて

これからの支援システムに必要な機能（その②）

【これまでの事例検討、意見交換より】

・　いろいろなコーディネート機能を持つ人たちが集まって情報共有をしながら、自分たちの役割を見直す、俯瞰的に見ることが出来るような場があるとよい。

・　個別のケース、個のネットワークにおける課題と、（市レベルなどの）全体の連携システムの課題を相互にやり取りしながら改善できるようなやり取りができるとよい。（→個のケースから全体を見る、全体から個のケースを見るなど）

・　例えば事例検討を、一般の小児科がオーディエンスとして聞けるような公開の形にすれば、それがひとつの研修会になって非常によいと思う。

今後の予定

《第七回》 ※　web会議開催

〔日程〕令和4年3月29日(火)　19:00～20:30

※閉会時間は見込み

〔時間〕19:00～20:30

〔形式〕web会議（Microsoft teams）

〔内容〕専門部会議論のまとめ（案）について